

「造形」におけるオンライン授業の取り組みと指導法 — 実態と今後の学びのあり方 —

The online lessons and teaching methods in art education for children: the present situation and future learning

半田 結*
(令和3年2月3日受理)

要約

令和2年度は、コロナ禍において大学の授業のほとんどがオンラインで実施された。本研究は、保育者養成における「造形」や「図画工作」といった実技や演習が中心となる科目で実施された授業内容を資料として、オンラインで行った指導の効果や課題を検討した。オンライン授業を振り返ることで、改めて対面による授業や大学での学びのあり方が浮かび上がるとともに、これからの学びと指導のあり方をより広い視点から検討する必要があることが確認された。

キーワード：造形、指導法、オンライン授業

keywords : art education for children, teaching methods, online lessons

1. はじめに—問題意識

保育者養成において、造形や図画工作、美術をオンラインで教授するには、どのような課題があり工夫が必要なのであろうか。

新型コロナウイルス感染症の拡大をうけて、令和2(2020)年5月4日には緊急事態宣言が延長され、全国の学校で休校が続いた。文部科学省は大学等に「多様なメディアの高度な利用などを通じて、教室外の学生に対して行う授業(遠隔授業)の活用」を求め、5月12日時点の調査で、その96.6パーセントが「実施または検討する方針」を出した*¹。

本学においても、わずかな準備期間でオンライン授業体制が生まれ、すべての学部でオンライン授業が始まることとなった。実習や演習科目が多く、その科目群のほとんどが免許・資格にかかわる科目で構成されている保育科においても、5月11日から始まった新学期(I期)は、ほぼすべての科目が同時双方向タイプやオンデマンドタイプなどによるオンライン授業でスタートした。

筆者が担当する「造形」は、本学の現在のカリ

キュラムでは幼稚園教諭免許と保育士資格には必須の、いわゆる「教科に関する科目」である。保育実践に必要な造形に関する知識と技術を身につける半期15回の演習科目であり、実際に制作したり実践したりすることが中心である。半ば強制的なオンライン授業化は、否応なく指導方法や授業内容を変えざるを得ないところがあった。しかし、目の前で生じる課題に対応していくにつれ、それまで行ってきた授業では見えなかった学生の姿や、授業方法そのものに対する見直しの機会もまた生じてきた。

文部科学省はその後、対面授業を積極的に活用するよう調査等を行っているが*¹、新型コロナウイルスの感染や終息状況が予測できないことを考えると、対面授業とオンライン授業のハイブリッドスタイルはもちろん、同じ内容の授業を対面とオンラインで同時に行うハイフレックススタイルをも視野にいれていかなければならないことは明らかである。何よりも一旦手に入れた「いつでもどこでも受講できる／教授できる」新しい学びのスタイルを、手放す理由はないだろう。

(*はんだむすび 保育科教授 美術教育学)

令和2年度も終わりに近づきつつある現在、「造形」のオンライン授業を通して見えてきた指導のあり方を振り返り、これからの指導法について検討を加えることは必要なことである。オンライン授業は、単にこれまでの授業をオンライン上で行うといった技術的なことではなく、教育や学びのあり方を本質的に大きく変える可能性をもつものだと考えるからである。そこで、本論では、筆者が担当する「造形」の授業実践を材料として、オンライン授業によって見えてきた指導上の課題や可能性、対面授業の価値について検討していきたい。それは、今後の学びのあり方を大きく示唆するものと確信している。

2. 「造形」の授業内容と指導方法

本論で取り上げる「造形」は、幼稚園教諭二種免許状および保育士資格の取得を目指す保育者養

成課程のなかの科目として設置されている（表1）。幼稚園教諭二種免許状取得のための「教科に関する科目」として「造形A」「造形B」の2科目が、保育士資格取得のための「保育内容の理解と方法」として「造形A」が開講されている。

2017（平成29）年3月に『幼稚園教育要領』が改訂されたことを受けて、「幼稚園教諭養成課程」および「保育士養成課程」が改訂され、現在は、新教職課程への経過措置期間である。別稿で整理したように*²、本学においても今後、新しい教職課程が編成されることになるが、オンラインでの授業の現状を確認しておくことは必要なことであろう。

2020年度のシラバスにある「造形A」および「造形B」の科目の目的は次の通りである。

表1 本学の「造形A」「造形B」の位置づけに関する開講科目一覧

幼稚園教諭二種免許状			保育士資格			
教科に関する科目	国語	日本語（読解と表現）	保育の内容・方法に関する科目【必修科目】	保育内容総論	保育内容総論	
	算数	算数		保育内容演習	保育内容・健康	
	生活	生活概論			保育内容・人間関係	
	音楽	音楽教育A			音楽教育A	保育内容・環境
					音楽教育B	保育内容・言葉
					器楽A	保育内容・表現A
					器楽B	保育内容・表現B
	図画工作	造形A		造形A	保育内容の理解と方法	音楽教育A
				造形B		器楽A
	体育	幼児体育A		幼児体育A		造形A
				幼児体育B		幼児体育A
領域及び保育内容の指導法に関する科目	保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）	保育内容総論	児童文化			
		保育内容・健康	音楽教育B			
		保育内容・人間関係	音楽教育C			
		保育内容・環境	音楽教育D			
		保育内容・言葉	器楽B			
		保育内容・表現A	造形B			
		保育内容・表現B	幼児体育B			

造形A：子どもを取り巻くさまざまな環境が造形表現につながるような、基礎的な造形技術や知識を身につけることを目的とする。

造形B：子どもの造形活動を適切に支援できるように、協働的な学びを通して、造形技術や知識をさらに深く学ぶことを目的とする。

なお、本科目は、美術教育を専門とする教員と版画を専門とする教員の2人体制で担当しており、昨年度は半期15回の授業のうちオリエンテーションとまとめを含む3回を合同で行い、残り6回ずつをそれぞれが担当した。

はたして、授業の目的を変えずに、オンライン授業でどのようなことが可能なのだろうか。Ⅰ期開講の「造形A」およびⅡ期開講の「造形B」の修正後のシラバスから、それぞれテーマと内容を抜き出したものが表2～表3である。内容については、使用する用具や実技の種類がわかるように簡略化している。

まず、オンラインで授業を行う際に直面させられたことが、必要な材料や用具をいかに学生たちに届けられるのかということであった。授業で使用する紙類、描画材、用具等は教室に準備されていたが、当初はそれらを配布する時間と術を持ち合わせていなかった。「造形A」では、絵具や色紙を使った内容を半分以上計画していたが、結果的に、Ⅰ期は身の回りにあるものを活用する、または学生が個人で調達するという方法をとらざるを得なかった。その結果、「造形A」はほとんどすべての回で内容を変更することになった。

次に検討したことは担当制についてであった。前述の通り、この科目は免許・資格の必修科目であり、かつほぼすべての学生が受講することから2人体制で行ってきた。それぞれの専門を活かしほとんどの授業をオムニバスで別々に行ってきたが、状況に臨機応変に対応するためにすべての回を2人で実施することとした。これが結果的にそれぞれの得意分野を生かした新しい教材開発につ

ながり、科目に対するこれまでとは異なる見方ももたらした。

授業は、LMS (manaba) であらかじめ授業の資料を提示して、準備物や授業内容を確認するよう求め、原則、オンライン会議システム (Zoom) による同時双方向授業で行い、課題をLMSに提出するという方法をとった。

では、今年度実施した「造形A」について、実施内容、検討すべき課題とともに述べる。なお、下線は、次項で検討する課題を示している部分である。

(1) 「造形A」

第1回：オリエンテーションとして、授業に必要な紙類、糊、ハサミ、色鉛筆、クレヨンなどの材料や用具などは自分で準備すること、さらに、課題(制作した作品)はポケットファイルに整理し、授業終了後に提出することにした。

第2回～第3回：「今、必要なものを作る」というテーマで、当時、必要に迫られていたマスクを制作することとした。造形は生活に根差しており、必要なものを作ることは必然だという考えから、昨年度は、クロッキー帳などを入れるオリジナル布袋を制作していたが、今期は、表面に絵柄などを入れたオリジナルマスクを課題とした。

第4回～第6回：子どもを理解する手立ての一つとして、子どもが描いた絵を見たり自分が描いた絵を分析したりすることで、保育者として必要な自己理解と他者理解を学ぶという、基本的には昨年度と同様の内容である。ただ、昨年度は、自分が描いた絵や子どもが描いた絵をグループで見せ合い、どのように感じ、どのように言葉がけをするか、また年齢と発達の関係などを話し合う方法で授業を進めていた。しかし、今期は、オンラインでのグループワークを行うことができなかったため、おとなや子どもの絵の見方の例などを一方的に説明することに終始した。絵を見る／見られるという相互のやり取りのなかでディスカッションをしたり、子どもが描いた絵を直接目で見て微細な表現をとらえるといったような体験の機会はもてなかった。

表2 【造形A】

回数	テーマ	内容
1	オリエンテーション	保育における造形の位置づけ
2	今、必要なものを作る①	オリジナルマスクを計画する
3	今、必要なものを作る②	オリジナルマスクを布で作る
4	自分を知る・子どもを知る①	絵に現れることを学ぶ
5	自分を知る・子どもを知る②	自分が描いた絵から学ぶ
6	自分を知る・子どもを知る③	子どもが描いた絵から学ぶ
7	身近なもので画面を作る①	自然物で顔を作る
8	身近なもので画面を作る②	人工物で画面を作る
9	保育に必要な色彩の基礎基本	色の組み合わせの基本を学ぶ
10	色で季節を演出する①	色紙で春／夏の画面を作る
11	色で季節を演出する②	色紙で秋／冬の画面を作る
12	色や形で自己紹介する①	絵本の内容を計画する
13	色や形で自己紹介する②	絵本の内容を制作する
14	色や形で自己紹介する③	絵本の表紙を作る
15	授業の振り返りとまとめ	レポート課題

表3 【造形B】

回数	テーマ	内容
1	オリエンテーション	保育における造形の意味と意義
2	表現を豊かにする技法①	絵具で中間色を作る
3	表現を豊かにする技法②	クレヨンのおまじまじな技法と表現
4	表現を豊かにする技法③	版やスタンプのおまじまじな表現
5	表現を豊かにする技法④	絵具のおまじまじな表現
6	表現をはぐくむ①	手足等が動く人形を計画する
7	表現をはぐくむ②	割りピンで動く人形を作る
8	表現をはぐくむ③	割りピンの人形を完成する
9	自然物で環境を豊かにする①	自然物を集める
10	自然物で環境を豊かにする②	自然物で飾るものを作る
11	身の回りの物で環境を豊かにする③	身近にあるリサイクル材を集める
12	身の回りの物で環境を豊かにする④	リサイクル材で動くおもちゃを作る
13	プレゼントするものを作る①	飛び出すカードを作る
14	プレゼントするものを作る②	飛び出すカードの完成
15	授業の振り返りとまとめ	レポート課題

第7回～第8回：造形で最も重要な要素が色と形、イメージであることを考慮し、身近なもので画面を構成するという課題を設定した*³。

昨年度までは全員が同じ色紙（トータルカラー76色）と用具を使って、たとえば、生と死のイメージ、直線と曲線のイメージといったように相対するイメージの画面を制作してきた。色彩構成ともいわれる画面構成は、形やバランスを見ながらひとつの画面を作る造形やデザインの基本とされる内容である。しかし、今期は、自宅や自宅の周りで手に入る自然物（果物や野菜、樹木や石ころなど）と、人工物（食器やカトラリー、化粧品など）を使った画面構成を課題とし、写真で提出する方法をとった。

構成という言葉になじみがない学生もいることを考慮し、「自然物で顔を作る」「人工物で画面を作る」という表現にした。教員による試作を数例示したほかに、図画工作や美術の教科書でも取り上げられているジュゼッペ・アルチンボルド(1526-1593、イタリア出身のマニエリスムを代表する画家)の作品などを紹介し、子どもの頃を思い出して楽しく気楽に取り組むよう説明した。学生にとっては外に出て自然物を集めたり、自宅にあるものをこれは使えないだろうかと探したりすること自体が、新鮮で楽しかったようである。また、写真に撮って提出するという手軽さも、課題に対する敷居の低さにつながったと思われる*⁴。

物を並べて何かに見えるように作ったり、組み合わせたり並べたりしているうちにあるイメージができあがってくる体験は、そのまま造形遊びであり、「表現のねらい」に通じることである*⁵。

第9回：授業を進めるにつれ、身近にあるものを利用した造形表現のおもしろさを学生も教員も感じていた一方で、保育に必要な色彩の基礎基本を確認する必要があるという思いも教員にはあった。そこで、色彩の三原色、明度、彩度などに関する資料とそれらを学習できるワークシートを作り、手持ちの描画材でぬったり、色や模様のついた紙類を貼ったりして学ぶという課題を設定した。

提出されたワークシートには、クレヨンや色鉛

筆、絵具、色紙、布地などいろいろなものが使われていた。提出を授業最終回の15回目までとしたため、教員は学生の制作のプロセスに立ち会うことなくワークシートという結果だけを見たことになる。なかには資料の内容がよく理解できていない、あるいは見ていないと思われるものも散見された。

第10回～第11回：保育の現場では、保育室や保育環境を季節に合わせて演出することが多い。特に色紙や色画用紙を使った壁面構成は、いろいろな場面で見受けられる。わが国の美意識が四季によって形作られ、色とともに四季の自然や風物が表現されることに特徴があるためと考えられる。そこで、四季の風景や風物に関する資料を読んでイメージを膨らませたうえで、色で季節を表現するという課題を設定した。

混色して自分で季節の色を作ることはかなりハードルが高いが、色紙であれば選択するという一工程で比較的容易にできることから、春または夏を表す画面、秋または冬を表す画面の色紙を使って制作するという課題とした。この場合の色紙は、自宅にある包装紙や千代紙などの紙類から100円ショップなどで求めたものでも、どのようなものでも良いこととした。

課題のサイズはファイルに入るA4サイズとしたためか、学生たちにとっては比較的取り組みやすい課題だったようである。とはいえ、季節の行事や風物を取り入れる場合、子どもの生活に密着したものの年齢や地域にふさわしいものが求められることを考えると、一般的な季節のイメージというよりも、その園にとって、その子どもたちにとって意味ある内容が求められることはいうまでもない。提出された課題は、ややパターン化されたものが多かった。

第12回～第14回：今期のまとめとして新たに設定した課題が「自分を紹介する絵本作り」である。それぞれが持っている材料や用具を使って、A4サイズの上質紙を5枚使った、見開きA4サイズ、4ページ（または8ページ）に表紙がついた自己紹介ブックである。絵具、マーカー、色鉛筆、色紙など、手持ちの材料を使って、4コマのストー

りーまたは自分に関する内容を絵と文字で表すというものである。学生にとって、実習などで自己紹介を求められる機会があることを想定した課題でもある。

提出された4コマブックを技法の面からみると、絵を描いたり色紙を貼ったりするもののほかに、飛び出す工夫や仕掛けを凝らしたものなどもあった。また、内容には自分の好きなものを集めて自己紹介するものが多く見られたほかに、水の大切さや宇宙、生命の大切さを伝えるといったようなストーリーのものもあり、課題に対する多彩な取り組みがうかがえた。またページ数を増やして作ったものもあった。手持ちの材料や器具を使用し、自分が取り組める範囲で工夫して行った結果が、この自己紹介ブックだったことを考えると、結果的にはあるが、主体的な取り組みそのこと自体が多様さをもたらしたのではないかと思われた。一方で、仕上がりのばらつきもみられ、指導方法について考えさせられることもなった。

ばらつきというのは、特に内容に関してである。教員は起承転結のように4コマのストーリーなり画面なりを想定して製本画面を計画したつもりだったが、なかには終わりがわからないもの、まとめがないものが見られた。絵に対する質問はいくつか見られたが、文章やストーリー展開に対する質問はほとんどなく、制作はほとんど学生個人に任せていた。途中、一人ひとりに声をかけて進捗具合を確認していたら、あるいは、提出の時点で確認していたら、もう少しまとまりのあるものになっていたかもしれないと思う一方で、はたしてどこまでが適切な指導なのかという思いも沸いた。造形や図画工作、美術は長く作品主義つまり結果主義に陥りやすいことを批判されてきた歴史があるからである。

第15回：「造形A」では、毎回、今の気持ちを色と形であらわすという課題の提出を求めた。これは、対人援助職を目指す者として自分の気持ちに意識を向けるよう意図したもので、表現力の向上や上手下手を問うものではない。

A4サイズ用の紙に、手持ちの描画材で何を描いてもいいこととして、紙に何らかの痕跡を残す

ことを求めたものである。自分の内面に意識を向けることを第一目的としたもので、気持ちというとりとめのないものに何らかの形を与えて、それを言葉にするというものである。振り返るという作業を通して、自分の考え方の傾向や描くパターンを見つけたり、何をしてもいいということを受け入れることで、描くことへの抵抗を少しでも減少させたいという思いもあった。

自分を振り返ることは簡単なことではないが、学生たちの声には次のようなものがあった。

「毎回絵を描いていいかげん嫌になったこともありましたが、こうして振り返ってみると、その時その時の自分の思いや気持ちを感じられて、絵に表すことで気持ちを整理できたような気がします。少しは成長したのかなと思いました。」

「自分の気持ちといわれても、最初はわかりませんでした。次第に今自分はこんな風を感じているのかななどと、自分の気持ちや変化に気づくことができました。*6

(2) 「造形B」

Ⅱ期の「造形B」については、材料や器具に関する知識や技術を学ぶ必要性を考え、あらかじめ必要な材料などを学生に配布した。絵具、色紙(76色入)、各色の画用紙、割りピンなどである。「造形B」については授業進行中ということもあり、課題と思われる内容を中心に述べることにする。第1回：オリエンテーションの後、「造形A」で提出された課題のなかから、ユニークなものやおもしろいアイデアのものを紹介した。このときの学生からの感想に「ほかの人の作品を見られて刺激を受けました」「同じ課題でもいろいろな工夫ができることがわかって発想が広がりました」といった趣旨のものが多くあり、学びにおける他者とのかわりの重要性を考えさせられることとなった*4。

第2回～第5回：Ⅰ期では、保育に必要な色彩の基礎基本(第9回)として、自分の手持ちの材料を使って色の学びを行ったが、今期は絵具とクレヨンを使って色彩や技法について学ぶ内容とした。保育の実践現場では、保育者が絵具を準備し

て子どもが共同で使用するという場面がほとんどである。その際、保育者には造形表現活動に対する適切な色や組み合わせを準備することが求められる。絵具は、用具の使用方法や混色、色の組み合わせなどに知識と技能が求められる内容であるとともに、準備や後片付けの時間が必要なこともあり、実践現場では困難や苦手意識を感じていることが指摘されている内容である*7。

はじめに混色の基礎的な知識・技能を学ぶためにワークシートを作り、授業中に混色の手順や方法を実際に示すことで、画面を見ながら学べるようにした。

また、クレヨンと水彩絵具を使ったパチックやにじみ、スタンプなどの技法の演習には、ブルーノ・ムナーリの『木をかこう』を参考に、いろいろな木を描くことをテーマとした。昨年度は描くテーマを特定しなかったが、テーマを決めるまでに時間を要したことや、学生同士で似たようなテーマが繰り返される傾向にあったため、デザインの発想を取り入れることでバリエーションを豊かにできるのではないかと考えたからである。

学生たちが提出した課題はどれもユニークな木であふれていたが、感想には、一人で準備をして課題を描き、後片付けをすることへの抵抗と苦手意識もまた、あふれていた。

第6回～第8回：割りピン人形は長年、行われてきた課題の一つである。紙で作った人形の首や手足を割りピンで動くように留めたもので、ペーパーサートの応用版という位置づけである。人形は頭、胴体、手足などをパーツに分けて作り、画用紙に色紙を貼って、割りピンで留め、最後に手足などを動かす棒をつけるというものである。動く人形を作るということで、おおいに学生たちの興味を引く課題であるが、オンライン授業ではいくつか検討しなければならないことも生じた。

教員は手順をイラストや文章で示して丁寧に説明したものの、手順の多さもあり、学生の課題への取り組みはスムーズにはいかなかった。人形は人型ではなくとも動物でも何でもよいこととしたが、イメージを決めて、それを画用紙に描くという最初の段階で滞ってしまった学生が多かった。

オンラインで試作品を示しながら説明しても、そもそも実際に紙に描く大きさ、人形全体のサイズのイメージがわからないという意見があった。昨年までは4コマの時間をかけて、教員が直接、細やかに対応していただけては、学生同士が互いに見たり相談したりしてイメージを膨らませることができたり、互いに工程や手順を確認することができていた。それが、オンライン授業では、まったく一人で、それまで手掛けたことのない課題に取り組むことになり、学生にとってかなりの精神的負担となったようである。

とはいえ、提出された割ピン人形は個性豊かでユニークなものが多く見られた。配布した材料の関係で昨年度までのものよりも小さいサイズとなったが、持ち運びが容易で使いやすいものになったようにも思える。

以上、第8回までの実施内容である。この「造形B」の目的に「協働的に学ぶ」という内容を設定しているが、実態としては、ブレイクアウトセッション機能を使って、課題の途中経過を見せ合うことを数回行っただけであり、協働とはいえぬものである。

次項ではオンラインで行った授業の問題点について、検討を加えていくこととする。

3. オンライン授業での指導の検討課題

(1) オンライン授業の課題

「造形A」「造形B」の実践から、本文下線部で示したオンライン授業での課題を整理すると次のようになる。

- ①描かれた絵などの微細な表現、サイズがとらえづらく、ものとしての実感に欠ける
- ②作業や制作しているプロセスを見ることができず、結果だけに注視しやすい
- ③一般的なイメージに終始しがち
- ④仕上がりにばらつきがみられる
- ⑤絵やものを介したグループワークが不十分
- ⑥学びにおける他者とのかかわりの重要性
- ⑦一人で準備し、制作し、片付けることへの困難や苦手意識
- ⑧手順や手数が多課題に向き合う際の集中力の

持続が難しい

⑨新しい課題への動機づけが困難である

造形活動はいうまでもなく、ものを介した活動であり演習である。①で示されている、描かれた絵の表現やサイズ感などの物質性、身体性をいかにリアルに伝えられるかは、カメラの性能や撮影の工夫にも大きく影響される。オンライン授業を行う側の努力が求められることはいうまでもなく、授業の評価はオンラインの機能にいかにか精通しているかが今後問われることになるだろう。その一方で、受講生の側もまた、一定レベルの性能を持つ機器の準備が求められる。スマホで受講している学生が少なからずいることも事実である。

いずれにしても、ものを介した学びとは、数字上のサイズではなく、身体性や空間性によって把握する、理解するといった性質のものである。物質性や身体性の担保は、対面による直接体験がもっとも現実的だといえよう。

また、②に関しては、成績評価と関連する問題である。制作のプロセスにかかわることがないということは、プロセスを評価しづらい、作品主義に陥りやすいということである。通常は、できあがった作品（提出された課題）そのものに、授業での学生の制作プロセスをも反映して評価している。たとえば、課題に取り組む姿勢として丁寧にかかわろうとしているかどうかは評価にかかわる点であるが、提出された課題のみであれば、学生本人の取り組みはきわめて評価しづらいことになる。多かれ少なかれ教員は学生の特性や個性を考慮に入れた指導や配慮をしながら授業を進めていると思われるが、オンライン授業では何事もなく過ぎてしまうという恐れがある。実際に、資料を読んだだけではわかりづらい、書かれていることがわかりにくいという学生もいたに違いない。誤解を恐れずにいえば、オンライン授業では画面に映る学生の顔は見えていても姿がわからず、学生がすべて一律にみえてしまうことがある。

そもそもオンライン授業では、学生と目を合わせて話すこともまた極めて難しい。同時双方向授業でもカメラはoffで行われることが多く、学習

効果を高めるには小テストやアンケート、ディスカッションなど様々な方法で授業に参加できる工夫が求められる。オンライン授業を行う教員もまた、ICT技術に熟達する必要があり、ユーチューバーのようにいろいろな技術や方法を駆使することが求められるのかもしれない。

③は、子どもや現場にあった保育を展開していくための、大学で学ぶ内容と方法に関する問題である。『幼稚園教育要領』が改訂され新しい教職課程に移行することと無関係ではない。造形では特に、ある季節あるいは特定の行事にふさわしい絵柄がパターン化されて再生産されていることは否めない。子どもの自由な思いつきや発想を大切にするには、学生自らが学びを発見できることが重要であり、養成課程に求められていることといえる。

また、デジタルネイティブといわれる子どもたちだからこそ必要な学びや教材研究も今後、求められることだろう。造形が直接体験を重視することはもちろんであるが、学生たちがイメージを広げ深める方法として、インターネット上の良質なプログラムやICT教材の活用も必要であろう。吉村がいうように、視覚文化全盛の時代を生きる子どもたちにとって必要不可欠なイメージの「読み書き能力」を身につけるためにも、文化受容者の育成のためにも、造形、図画工作、美術の授業は重要である*⁸。

④の提出された課題に多様性やばらつきがあることをどのようにとらえるかということは、⑤～⑧ともかかわってくる問題である。一言でいえば、学びにおける他者とのかかわりということに集約されると考えられる。

造形の授業は通常、教員が授業内容や課題を説明し、学生が課題に取り組むという順序で行われることがほとんどであるが、教室で一斉に対面授業が行われる場合は、教員の話聞いていなくても、またアイデアが思いつかなくても、周りの学生に聞いたり様子を見たりして、学生は何が求められているのか、何をするのかを把握できることがほとんどである。教員もまた、教室全体を見ながら、説明が不足していると判断した場合は追

加説明をしたり、質問に答えたり、おもしろい工夫やユニークな表現をしている場合は取り上げてほめたりして授業を進める。学生と教員の両者によるこのような複線的なつながりや、その場の雰囲気、空気感が、集中力の維持や動機づけにもかかわっていると考えられる。多くの学生たちが課題に取り組むことに抵抗を示していた割ピン人形について、ある学生の「みんなでやったらすごく楽しい課題だと思うのに」という言葉は象徴的である。

しかし、オンライン授業では、そのようなことがほとんどできない授業の進め方となる。今回は、学生個人が制作している過程を見ることはもちろん、材料や用具も十分確認できない状況で進められた。つまり、教員の目の届かないところで行われたのである。それが、逆に学生による自由な材料や用具の使用、他の学生にあまり影響されない独自の表現につながったことも事実であると思われる。

また、対面で授業を行う場合は、学生は否応なく進み具合を確認され、進み具合が少しでも遅かったりわかっていないようであれば、教員は意図的に介入して、場合によってはアイデアや工夫の仕方を提案することが少なからずある。はたしてこうした介入は、学生にとってどれほど効果的なのだろうか。造形があまり得意ではない学生や苦手意識がある場合は特に、教員の介入が造形表現の苦手意識を増幅させることがあるということは覚えておかなければならない*⁹。

⑨については、課題をどのように設定するかということとも関連するが、課題が保育のなかでどのような意味があり位置づけなのかを明確にしておく必要がある。たとえば、絵を描くことが苦手という学生は少なからずいるが、養成課程で学ぶことは保育者が絵を描くというよりも、楽しく描ける＝子どもが遊ぶ環境をいかに準備するかということである。苦手であればこそ、どのような環境であれば取り組みそうかということに思いをはせることが重要であり、環境を作る人の在り方こそが重視されるべきである。学生がそれぞれの生き方をして体験するなかで獲得し、身につけた感

覚やセンス（感性）で、まずは子どもやその場（環境）にかかわっていくことが何よりも必要なことだと考える。

以上、「造形」をオンライン授業で行うことで見えてきた課題、問題点について検討した。

(2) 今後の学びに向けて

—「造形」を支えるもの／こと

オンラインで授業を行うことで見えてきた、思いのほか重要だと考えることを確認しておきたい。

一つは、使用する材料や用具のあり方についてである。前述の通り、I期は学生個人が必要だと思うものをそれぞれが準備した。統一されたものではなく、各個人の身近にあるもの、集めやすいもの、手に入れやすいもので授業は進められた。

そのことによって、教員は、身近にあるもので行うというブリコラージュ的で即興性を帯びた課題を考えることになった。それに対して学生は、課題のほとんどを色鉛筆のみや、マーカーペンのみで提出した学生がいるかと思えば、マーカー、クレヨン、多種多様な紙類などを単独あるいは組み合わせて使用した課題を提出した学生もいた。定規や何かの型を使ったものもあれば、ほぼフリーハンドというものもあった。明らかに試行錯誤しながら仕上げたと見えるものもあれば、とりあえず課題は出したと感じさせるものもあった。

提出された課題を見て思うことは、このようなばらつきがあること自体が自然なのではないだろうかということである。与えられたものではなく、自分で材料を調達し、それをあれこれ工夫する。決まったものを教える、作品を作るということではなく、このような方法があるのだという気づきや、このようなものもできるのだという発見のあるあり方が、ものとの直接体験を重視する「造形」を支えているといえるのではないだろうか。

この材料や用具と関連していることに、オンラインで技術を伝えることのむずかしさがある。たとえば、筆の使い方やあしらい方、絵具や水の量の加減などは、何度も実際にやってみて会得していくという側面が大きい。それらをどのように保

障していくのかについては別稿に譲るが、何度も実際にやってみて習得していくということは、体験を重ねて学ぶということにはほかならない。オンライン授業を行うことで明るみになったことの二つ目は、この体験による学びを保障するという点である。子どもたちの体験不足や、経済格差が文化格差を生じることがすでに指摘されていることであるが^{*10}、そうであればこそ、材料や素材、道具の扱い方などの経験の機会を十分保障する必要があると考える。

三つ目は、学びの場所性についてである。オンライン授業は基本的に、一人で学ぶことを前提としている。それは必然的に学生の能動性を求める。その場ですぐ結果を示すことができること以外は、教員の説明が不十分であっても、学生が聞き逃していても、自ら問いを発しなれば、そのまま流れていく。能動性を身につけることで学生は授業への参加意識が高まるだろう。しかし、機器に不慣れだったり抵抗がある場合、または多くがそうであるように受動的に授業を受けることに慣れている場合は、慣れるまでに時間がかかったり、ドロップアウトしてしまったりすることも考えられる。

もちろんそうした一方で、不明な点は後で誰かに聞いたり、場合によってはネットで検索して調べたりすることもできる。オンライン授業では、授業のスライドや授業の録画を繰り返し見られるようにしておくことが多いと思われるが、それは、学生が自分の学びをカスタマイズできるということでもある。自分に適した学びを自分でという個別の学びの最適化は、文科省と経産省が提唱するSociety5.0政策である^{*11}。しかしながら、ここでもやはり学生個人の能動性ややる気が試されているといわざるを得ないだろう。コロナ禍におけるICT教育は保護者の学歴などによる格差の存在が指摘されていることを考えると、一人一人の学生への学びの保障がますます大切であるとはいってもない^{*12}。

学びの場所性ということで、オンライン授業でもグループワークや、共同でできることはある。しかし、その性質はまったく異なる。対面授業で

は、チラ見や暗黙の了解、意見を言わなくても何となくその場の雰囲気を感じられる。そこにいる人同士のこうした受け止め方は、場が盛り上がる方向にもいけば、場の圧力ともなる。オンラインでは場の雰囲気がなくなるので質問がしやすいという声もあり、同調圧力の問題は、こうしたことをよく表している。

学びは、教師からだけではなく、他の学生から見よう見まねで学ぶことも多い。もっといえば、学びは頭のなかだけで行われるのではなく、身体を使ったり、人と話したり、外からの刺激によって進んでいくものでもある。「人が人に教え、人が人から学ぶときに不可避な不完全性が、かえって不完全であることによって、多様な偶然を生み出し、それが意味を持つこと」^{*13}の豊饒さを教育は捨て去ってはならないだろう。

以上、オンライン化によって明確になったことである。当たり前といえば当たり前かもしれないが、通常であれば見えにくくなっている、意識しづらくなっていることが、オンラインで授業をすることで確認、体験させられた。

オンライン教育では身体性や集団性を伴う内容を実施することは難しいと指摘されているが^{*14}「造形」の授業実践を振り返ることで、同じ場に在ることの圧力とともに豊饒さをも確認させられた。学びは一人でできるものではなく、みんなで作るものである。しかしながら、オンライン授業、ICTを活用した授業は、これから生きる子どもや学生たちの教育にとって必要欠くべからざるリテラシーでもある。今後の「造形」の授業をよりバージョンアップさせていくためにも、さらなる検討を続けていきたい。

4. おわりに一まとめと今後の課題

オンライン教育のメリットとしては、知識伝達型の学びに適していることがあげられる。また、場所性がなくなり教室内の雰囲気がなくなることで、オンライン上では質問しやすいという点もある。さらに、PC画面越しの方が、資料がよく見え、声をよく聞こえる。教員との距離を近くに感じるといったことも指摘されている。

オンライン授業を行ったことで、あらためて大学という場の雰囲気や教員や学生がいるという臨在性、つながりなど、言語化しにくいのが確かにそこで感じられる非認知的なもの確かさが浮かび上がってきた。これらはオンラインでは感じられにくいことである。大学には知識を身につける以外にも、たとえば、いろいろな活動や日常会話を通じた全人的な教育としての価値、学び舎から生まれるコミュニティとしての価値など、多様な価値が含まれている。これらを保ちつつより適切な授業を展開していくために、今後ともオンラインと対面による教育の可能性を探っていきたい。

【脚注】

- * 1 10月20日調査 約半数がオンラインと対面の半々実施 URL：大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査 (mext.go.jp) (2020年12月27日検索) 全国学生調査
- * 2 半田結、井上朋子、永井夕起子「これからの表現教育の検討—音楽・身体表現・造形の視点から」『兵庫大学短期大学部研究論集』56号、2020
- * 3 幼児期の造形表現から就学後の図画工作に至るまで、その中心的テーマはこの3つとってよい。図画工作では〔共通事項〕として取り上げられている。『幼稚園教育要領』、『学習指導要領』
- * 4 学生の声や感想は、毎授業終了後に求めている、学んだことなどのチャットへの記載から抜粋した。
- * 5 「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」『幼稚園教育要領』（第2章ねらい及び内容 表現）
- * 6 第9回 manaba 提出レポートより
- * 7 山口喜雄、佐藤昌彦、奥村高明『小学校図画工作科教育法』建帛社、2018、p.5
- * 8 吉村壮明「『文化受容者』育成としての美術教育へ」『別府大学短期大学部紀要』第37号、2018、pp.41-49
- * 9 山口、前掲書、pp.4-7
- * 10 平田オリザ『新しい広場を作る—市民芸術概論要綱』岩波書店、2013年、独立行政法人国立青少年教育振興機構「自然体験活動等に関する実態調査」2005年 www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/84 など
- * 11 URL：Society 5.0 - 科学技術政策 - 内閣府 (cao.go.jp) (2020年12月27日検索)
- * 12 刈谷剛彦『コロナ後の教育へ』中央公論社、2020年、p.244
- * 13 刈谷、前掲書、p.245
- * 14 落合陽一「ポストコロナで変わる高等教育 公教育は教育格差をいかに埋めるか」『先端教育』Vol.9、先端教育機構出版部、2020年、pp.20-21

【参考文献】

- アディッシュ・ハンセン（久山葉子訳）『スマホ脳』新潮社、2020年
- 米津直希・宇田光・五島敦子・笹尾幸夫・大塚弥生「教職課程カリキュラムの実施における現状と課題：オンライン授業の実践交流を手掛かりに」『南山大学教職センター紀要』第6号、南山大学、2020年
- 「特集：CUCのオンライン授業」『View & Vision』No.50、千葉商科大学経済研究所、2020年、pp.24-69
- 「特集 学びの保障の具体策 教育現場のコロナ対応」『先端教育』Vol.8、先端教育機構出版部、2020年
- 「特集 オンライン教育 方法・サポート・制度」『先端教育』Vol.10、先端教育機構出版部、2020年

